斎藤 栄

完全アリバイ

中公文庫

中公文庫

完全(かんぜん)アリバイ

定価はカバーに表示してあります。

1998年8月3日印刷
1998年8月18日発行

著者 斎藤(さいとう) 栄(さかえ)

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Sakae Saito

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203221-0 C1193 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

完全アリバイ

斎藤　栄

中央公論社

目次

第一章　消えた花嫁　7
第二章　奇妙な誘拐　15
第三章　死への予感　23
第四章　ノイローゼ　30
第五章　助教授夫妻　45
第六章　恐怖の連続　68
第七章　飢えた野獣　92
第八章　決死の登山　113
第九章　第二の男性　126
第十章　遠い殺人劇　154

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第十一章　凶暴な爪跡　171
第十二章　意外な指紋　192
第十三章　新たな疑問　225
第十四章　重大な容疑　246
第十五章　公園の惨劇　262
第十六章　章吾の推理　283
第十七章　理絵の危機　299
第十八章　電話サービス　312
終　章　325
解説　影山荘一　335

完全アリバイ

第一章　消えた花嫁

1

新幹線〈こだま号〉は、定刻に東京駅を発車した。

ゆっくりとホームが流れてゆき、窓の外で祝福してくれた見送りの人の影が視野から消えた。

それまで中腰で、グリーン車の椅子から立っていた武宮章吾と新妻の瞳は、ホッとして坐り直した。お互いに顔を見合わせたが、何も言わなくても、〈やっと二人だけになれたね〉という意味は伝わってくる。グリーン車には空き席があった。しかし、今日は大安のせいで、章吾達のほかにも二組の新婚旅行組が、同じ客車に乗り合わせていた。

若手の産婦人科医である章吾には、挙式の疲労はさしたるものに感じられなかったが、

瞳はさすがに疲れた様子だった。

結婚式と披露宴は、有楽町の東都ホテルで、三百人の参会者を集めておこなわれた。仲人(なこうど)がK大医学部付属病院長の大倉正道教授だったこともあって、医学部の先輩や関係者など、著名人の出席が目立った。

瞳の方は、父親が大京銀行銀座支店長だから、同行関係者のみならず、金融畑のジャーナリストまでが列席し、さながら、医学界と金融界の結婚式という観を呈した。

新婚旅行の日程(アイチーネウリイ)は、今夜は熱海の〈大幸閣〉で一泊。その後、関西、九州へと九泊十日の予定になっていた。

「疲れた?」

章吾は訊いた。

「ちょっぴり……。でも大丈夫よ」

瞳は、不必要な心配をさせまいとして言った。

「疲れるというのは、大脳が興奮して疲労するからなんでね。犬の大脳をとったら、ほとんど眠らなくなったという実験データがあるんだよ。今夜はよく睡眠をとって大脳を休ませてあげなさい」

章吾は、医者らしい言葉で、新婦を慰めながら、前の座席(シート)の背もたれに手を伸ばした。

その網ポケットに誰かが置き忘れたらしい新聞が、小さく畳んで入れてあった。
日付は七月二十七日水曜日。今日の朝刊である。慶事にとりまぎれて、今日は新聞に目を通していないのを思い出した章吾は、何気なしに、紙面を開いた。
すると、軽い音を立てて、何かが床に落ちた。
「あ」
と、章吾は、思わず低く声を出し、床に落ちたものを拾おうとして躊躇した。
それは、縁を黒く囲んだ白い花型の喪章であった。
新婚旅行の門出に、喪章など、縁起でもない話だが、章吾はそれを自分達と結びつけては考えなかった。
「しようのない奴がいるものだな。こんな場所へ捨てるなんて……」
問題の喪章が、新聞紙の間に挟まっていたことから、章吾は弔事に出席した女性の一人が、そこへ置き捨てにしたものとばかり思った。
瞳は、二重の美しい眼で、不気味な昆虫でも見るように眺めていたが、生来の頭のよさが、ある疑問を発見した。
「このM新聞、首都圏版だわ。とすると、新大阪の方で、車内清掃をしなかったために、折り返して来たのかしら」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「さあね」
「そうでないとすれば、誰かが、わざわざ、この〈こだま〉に私達が来る前、ここにおいたとしか思えないわ」
瞳の表情が曇った。
「え。ぼくらのために、この喪章を?……」
と、章吾は声を大きくしかけて、慌てて囁く調子に変えた。「どうしてそんなばかな真似をするんだい? 嫌がらせをしたところで、誰も得はしやしない」
「ご免なさい。私も確証があって言ったわけじゃないわ」
「とにかく、これは目障りだから、捨ててこよう」
章吾は、汚ないものを摘むように、喪章をM紙の間に挟み直すと、それを持って、トラッシュの方へ大股で歩いて行った。
一組の新婚が、ちらっと章吾へ視線を投げた。彼等は、手と手をしっかり握り合わせている。幸福を実感しているのだろう。
〈こんな喪章、偶然だろう……〉
章吾は自分に言いきかせ、気にかけまいと思った。
〈こだま〉は、間もなく新横浜に到着するところだった。

2

喪章の一件はあったが、ほかに事件が起きたわけではなく、章吾と瞳の新しいカップルは、予定の時刻に、熱海の〈大幸閣〉に着いた。

〈大幸閣〉は、同じ熱海市内でも、東海岸の繁華な街から離れ、初島を正面から見渡すような丘陵の頂きにあるので、新婚の一夜を過ごすには適していた。

章吾達の予約した客室は、寝室のほかに和洋両室を備えた特別室だった。特別室は、単に部屋や調度品が高価だというばかりではなく、客室係のメイドも、専任者がついている。いわば、お手伝いの付属した客室になっていた。

暮れなずんでゆく相模湾の変容を、しばらく眺めていた章吾は、寄り添う瞳のノースリーブの肩のあたりを抱いて、しっとりした情感と共に熱い唇づけをした。

女性だけを相手にする職業であっても、妻に対しては、特別の感情が籠る。章吾は、あえて婚前の交渉を持たなかった。もしそうすれば、瞳の躰を、医者として診てしまうような気がしたからだ。

瞳の唇は、熱があるように燃えていた。

それから二人は、八階の〈スターライト・レストラン〉へ出かけた。

この頃には、〈こだま〉の車内で見かけた不吉な喪章のことなど、章吾も瞳も忘れていた。

〈スターライト・レストラン〉から俯瞰する夜の熱海の景観は、黒い影絵に金と銀の灯を点じたかと思われた。この夜は東海岸のあたりで、打上げ花火が華麗な火の交響曲を奏で、夏の開幕を告げていたので、一層、見ごたえのする情景をつくりあげていた。

フランス料理も格別だった。

二人は、シャンパン・カップで乾杯し、「よろしく」と言い合ってから、〈フィナンシエール風煮込み入り大形パイ〉を賞味した。つけ合わせは、オリーブ、マッシュルーム、仔牛の肉だんごである。

瞳は、用心深くフォークを動かしていた。あまりの旨さに、羽目を外して、自分の初夜に汚点を残したくないという気遣いもあった。

章吾は、披露宴での祝辞の二、三を話題にして、褒めたり批判したりしたが、それはとりとめのない雑談に過ぎなかった。

あらかた料理が出尽くしたところで、瞳は、

「ちょっと……」

と言い残して席を立った。
これは淑女の身だしなみを整えるための離席なのである。
章吾は、瞳がいなくなった後、しばらく窓外の花火に目を奪われていた。地上から、白い飛翔痕を一直線に伸ばし、やがて、パッと大菊に咲く花火。
その華麗さは、やがて、章吾の身の上にも訪れることが予約されているのだ。そう思うと、その花火は、新婚第一夜を飾るのに、もっとも相応しく見えた。
瞳はなかなか戻ってこなかった。
章吾は、デザートにコーヒーなど、ゆっくり時間をかけて片付けた。しかし、それでもなお、瞳は姿を現わさない。
〈気分でも悪くなったかな……〉
フト、そう思った途端、瞳の姿が自分の患者の一人に見えてくるから、奇妙なものである。
章吾はテーブルを離れた。
「もう、よろしゅうございますか？」
チーフ・ウエイターが、瞳の席の前に残っているデザート類を見て訊いた。
「ああ、どうぞ」
そう言って、彼はレジスターでビルにサインした。サインをしている間に、急に不安の

波が胸を襲った。

例の〈喪章〉が瞼に浮かんだ。

大きなストライドで、章吾は淑女用化粧室へはいってみた。

〈いない！〉

当然、そこにいなければならない瞳の姿は消えていた。

〈何が起きたのか？〉

化粧室の脇に、青いランプで表示された非常口があった。もし、瞳がここから連れ出されれば、ホテルの従業員や客の目に、ほとんど触れることなく外部へ消えてしまうことだろう。

〈そんな、ばかな……〉

章吾は頭が混乱した。新婚旅行の第一夜に、花嫁を奪われてしまうなどという事態は、あってはならないことだ。

〈どうする？〉

単なる臆測で騒いでは、章吾自身の恥になる。

自分の客室に戻って、ひとまず考えをまとめよう。それから、ホテル側に事情を告げよう、というのがそのときの結論だった。

第二章　奇妙な誘拐

1

章吾が自分の予約している特別室へ戻ったのは、そこに瞳がいる場合を期待したためもあったが、やはり彼女の姿はなかった。

〈これは放っておけないぞ〉

事態は急を要する、と章吾は感じた。自然に、ひょっこりと瞳が帰ってくるとは思えなかった。

恥をしのんでも、ホテルと警察に、緊急事態の発生を知らせよう、と客室（ゲストルーム）の象牙色（アイボリー）の送受器へ手を伸ばしたとき、突然、逆にそのベルが鳴った。

妙に冴えた音色（ねいろ）だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton